断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑰

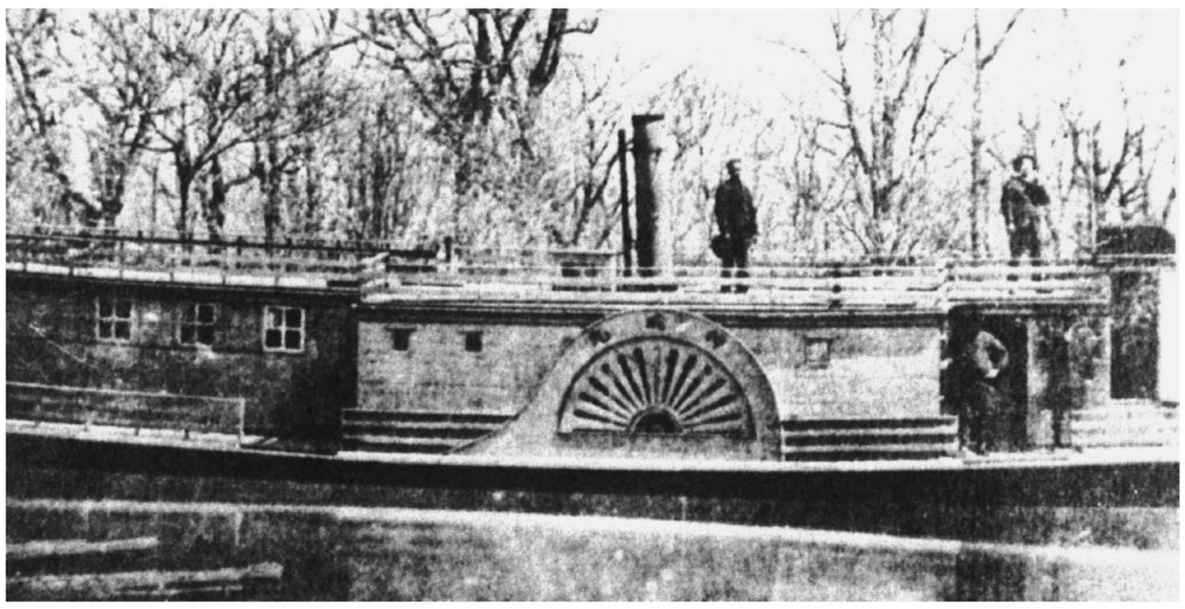
高橋 基

―ハルシナイから上流へ⑫―

明治十四年九月に、樺戸郡須部都（現・月形町域）に、徒・流刑等に処せられた重罪犯を収容する監獄（現・刑務所）の樺戸集治監（「しゅじかん」とも読む）が設置された。周知のように、上川道路（現・国道十二号）の開削と改修や、永山屯田兵村の家屋建築など、樺戸集治監の囚徒による上川開発の業績は、計り知れないものがある。

石狩から樺戸集治監までは、公的な道路がまだなく、札幌からも石狩川を丸木舟で三日もかかった。そこで、囚徒の護送や物資の輸送のために、明治十七年に監獄汽船と言われた神威丸と安心丸が造られた（『北海道行刑史』『月形町史』）。**写真**は神威丸で（『写真集えべつ風のまちの歴史』所収）、この船の特色は、蒸気機関を備えた外車船（外輪船）で、川の水量が少ない時でも運行できるように吃水（船が静水上に浮かんでいる時の水中に沈んでいる部分の高さ）を二尺（約六〇センチメートル）と浅くして、淀川船やはしけ船を引いて航行できるように造られていることである（『石狩川舟運史』）。

このような状況の中、明治十六年九月三日から十四日まで、樺戸集治監の副典獄（現・副所長）の桜木保又ほか四名が、浦臼地方から上川郡までの「水利、地理、検探の命を拝し」、「ウシ、ヘツ」（現・牛朱別川）までの調査をしている。今回は、この調査団の樺戸集治監御用掛の井上敬之輔の出張復命書で、その一部を紹介する。



監獄汽船の神威丸

調査団一行は、九月三日樺戸を出発、カムイコタンに到着したのは、九月八日の午後五時三十分であった。調査団一行は、丸木舟ではなく、蒸気船の「樺戸丸」で遡航して来たのである。管見では、カムイコタンの歴史始まって以来の出来事である。復命書では、「本監常備の樺戸丸ハ日本形淀川船ヲ換造シ、船脚（前記の吃水に同じ）二尺五寸（約七六センチメートル）、噸数五十石以上ヲ搭載ス」と記録している。紙幅の関係で詳述できないが、この樺戸丸は、明治十七年に楽産商会が建造した同名の樺戸丸ではなく、前述の参考文献にも一切登場しない、謎に包まれた船である（『石川島重工株式会社一〇八年史』）。

さて、調査団一行は、九月八日にカムイコタンに到着したのであるが、樺戸丸が碇泊した場所は、現在の神居大橋の下流のパラモイ（para-moy広い・湾）である。調査団一行は八日と九日は、樺戸丸の船内で二泊し、「モセウセ」（現・妹背牛）から水先案内を依頼した和語に通じたアイヌの「ランケク」を上川に派遣し、上川からの丸木舟の到着を待つた。

九月十日、午前七時に「ハルシナイ」に徒歩で移動を開始し、十一時三十分に、「ランケク」と「チカホニ」（現・近文）のアイヌ「シウクシ」「イタンキノ」「アンリキシ」が二艘の丸木舟で迎えに来た。昼食後に「チカホニ」に向け出発し、午後六時二十五分に到着し、小屋を築き露泊する。

九月十一日には、「チカホニ」から「ウシ、ヘツ」（現・牛朱別川）に到着、その土地を調査して即刻帰途につく。その後は一気に石狩川を下る。**掲載地図**のレーコロプイラ（re-kor-puyra名・を持つ・激流→「有名な激流」の意）は、文化四年（一八〇七年）に近藤重蔵の乗った丸木舟が転覆破船したエピソードのある有名な危険水域で、ここを下る復命書の文章は、緊迫感溢れる名文であるが、紙幅の関係で、その項で紹介したい。

カムイコタンの樺戸丸に戻った調査団一行は、樺戸丸で一泊し、翌十二日に樺戸に向かい下り、九月十四日に樺戸集治監に帰り着いた。官船・樺戸丸という蒸気船によるカムイコタン踏査の唯一の貴重な記録である。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します